

現代アメリカ口語の生態

茂 松 文 雄

序にかえて

本論文の目指すところは、現代アメリカ口語の真相を究明する目的をもって、まづ言語の生命ともいうべき、音声面の観察を主調として、言葉の温床とも思われる未成年者のことばのすがたを観察し、それに根をおろしている現代の米口語の生態を眺めてみたいのである。

1. 現代米語の趨勢 人間の音声は同じ国語であっても、厳密に言えば、多少の個人差がある。それは勿論相互理解の上に大きな支障とはならぬ。さらに地方差となると集団的に差違を累加して、所謂地方訛 (Dialect) となる。

現代米語の根幹をなす語法はその祖語たる簡素な古代・中世の英語に第一の根拠があるように言われるが、必ずしもそうとのみ断ずるわけにはゆかぬ。国語というものは、これを少しく詳細に検討するなれば、普通相異なる言語地域 (Speech-communities) で話されている方言 (Dialect) の集合体であり、しかも、その国語の言語構造の根幹は該国語に属するいづれの方言にも共通するものである。一方音韻・文法・語彙の細部にわたっては、同系の言語を話すそれぞれの種族の特性に従って、大なり小なり相異っている。此等方言が相互影響しあってその国語の形骸をなしているのである。方言はこれを大別すれば、大体次の五種となろう。

- 1) 地域方言 (Regional Dialect) — 同一国語に属する異った地域を占める言語地区で用いられるもの、
- 2) 社会的又は階級的方言 (Social or Class Dialect) — 同一地区内の同一社会階級で用いられるもの、
- 3) 権威方言 (Prestige Dialect) — 他の方言を話す者に憧憬又は羨望される人々によって用いられるもの、
- 4) 標準方言 (Standard Dialect or Standard Language) — 大多数のものに他

の方言より一般にすぐれていると認められているもので、教養ある階級又は指導的階級の人々に用いられるもの。

5) 文語方言 (Literary Dialect) 一文筆家、学者によって文筆の上で用いられるもの、

である。が、実際には此等いつれの Dialect を話すものも同一国語に属している以上相互理解の親疎はあっても互に理解出来、それ等のおのおの方言は長い間に国民の社会文化の進展と共に徐々に生々發展して止まるものではない。故に通時的には一貫してその国語の構造的根幹はそれに属するあらゆる方言のなかにも派々として生きている。しかし文法的な表現語法や音韻、語彙には僅かずつではあるが、時代の推移とともに変転している。国民や民族の生活、ものの考え方、感じ方に深く根をおろし、それ等に密着していることが天才の靈感によって駆使される時文学が生れ、詩歌がうたわれる。いわば文学や詩歌は民族や国民のことばの凝って昇華した精華ともいえよう。しかし、それ等を国民の日常生活のなかに自然に生きている国語の真のすがたのみ考えるわけにはゆくまい。

地方訛は暫くおき、米語と祖を同じくする英語とでは、縦に歴史的時代差に加えるに、横には気候、風土、人種構成、社会相等の相違によって語彙、語法の差違があると共に、音声が同一ではないのが当然である。しかし甚だしい Dialect は別として、教養ある英人、米人の話す英語は英語を修得した我々日本人にも大体理解出来るところからすれば、両者相互間では、多少の strangeness を感じるところはあっても、相互の理解は一層容易であろう。それに現今教育、文化、通信、交通の進歩と共に両語間の差違すら、漸次中和される傾向である。英国内地の英語についてみると、England, Wales, Scotland 更に、Ireland とそれぞれの Dialect はあっても、London を中心として以南の地域で話される所謂 Southern English が英国中堅層を教育する Public Schools で用いられ、Public School Pronunciation (P.S.P) と呼ばれるに至り、それが近時 B. B. C 放送、T. V. によって地方にまで浸透して、加速度的に標準化の歩を速めていることは筆者も親しく経験して感じたところである。一方合衆国英語は H. L. Mencken (The American English) の予言にもかかわらず、本来進歩的な米人は大範圍の移住を好み、国内交通の普及につれて、表面的には地域差はあっても重大な変化は生じていない。米 Dialects は New England 諸州を中心とする東部の小地域と南部諸州とそれ等を除く所謂中西部の大地域の普通

凡そ三つの types に分けられている。(George P. Krapp, *The English Language in America*, The Century Co., for the Modern Language Association of America, 1925, Vol. I, pp. 35, 36, 41) 又 Dr. James F. Bender は *The New York Times Magazine*, Aug. 27, 1944 に寄せた Article には、“九千万が General American (すなわち、中西部型)を話す”と題して、約一千万が東部型、二千万が南部型、少くとも九千万が中西部の General American を話すと述べている。然し此等3つの型には幾分の差違はあっても、事実米人相互間には理解に苦しむことはなく、特に彼等の中には他の Dialects を非常な正確さで理解出来る人もいる。Henry Lee Smith, Jr. の如きその道の練達者は、自分の町から100哩以内に住む人の出身地をその話し振りで察知出来たという。(W. Nelson Francis, *The Structure of American English*, pp. 482) この事実を以てみても英語本来の姿には大きな根本的変化は見られぬと思われる。しかも Mid-west の所謂 General American の影響は次第に大きい。現時通信交通の伸長と共に Radio, T. V. は勿論 Reader's Digest, Life 誌等 circulation の広い大雑誌は多く General American で書かれている事実から徴しても、標準化の営みが、ここにも行われているのを覗うことが出来よう。

英米両国語の間も古くは相反駁の空気が強かったとは云え、漸次相互影響しあい、特に東部の大西洋を距てて英国に近い地域は彼我の影響が最も深刻であるのは自然の勢であろう。しかし大極からみて数において優勢である米語は国力の増大と共に英本国の英語にも、好むと好まざるにかかわらず大きな影響を与えてきたし、又将来も与えるであろうことは、言語というものの特質上当然である。我国の英語教育にも太平洋戦争以来、米語が急速に大きな影響を及ぼしていることは衆知のところである。

2. アメリカ音の概要 米国語の本質を語法上からにせよ、音声面からにせよ、究明しようとするれば、必然英国英語と対照してみなくてはならぬ。Jespersen はその名著 *Growth and Structure of the English Language* 初頭で近代英語の性格を論じ、綴字の上で子音が母音に比して多く、男性的な強い感じをうけるが、子音が多すぎないので粗野な響きはないという。又 accent が必ずしも語源的でなくとも、心理的に重要な音節の上にある結果として、単語の中の accent の位置が初めから定っているフランス語やイタリア語の場合よりも accent のある音節とない音節の間の強弱の差が顕著で、特に accent のある音節を強調する時は、その特徴がさらに顕著とな

ることを指摘している。また歴史的に語尾脱落の結果として、単音節や少音節語の多いことや、感情情緒の露骨な表現を抑える所から来る低音での談話が英国的教養の一特徴であるとし、これ等発音上の諸点と文法上の考察から、彼の到達した英語の性格は国民性が精力的で実務的、地味で達意を旨とし、文法上の拘束を嫌う傾向を表わしているといい、その結果日常語が音楽的な優美さに幾分欠けるところがあるともいう。さてここでその流れをくむ現代米語に目を転じてみると、前者と違った環境のもとに約200年という時を経て来ている米語は、言語の歴史としては決して長い時間ではないのであるから両者が大体同工異曲であることは、筆者でなくても大方これを認めるであろう。しかし、僅少の差違であっても、現代の米国語音の個々音とその連音、さらに文となって躍動するアメリカ文体の根底には英国英語とは異なる趣きを覗うことが出来よう。相次ぐ外寇をうけた英国が言語の上ではかえって他種族の言語を併せ吸収したその言語特性は、事情こそ違え米語についても考えられよう。英人が初めて大西洋岸に移住した17世紀に、Shakespeare, Milton, Bunyan の英語をもたらすのであるが、1620年の Pilgrim Fathers の渡米、1790年連邦憲法 (Federal Constitution) 発布の頃までにはアメリカ英語の基礎はほぼすえられたと思う。風俗、習慣、国語を異にするヨーロッパを初め東洋各地からの移民、移住者達もやがては互に耳慣れぬ語を身につけ、互の生活に影響されつつ互に同一言語に同化してゆくので自然発音は音声経済 (Motor Economy) によって、大体難から易の方向に流れる傾向で気取った発音より、平凡通俗なものへ同化されようとする傾向は変化の少い子音よりも微妙な発音筋肉の調整を要する母音の発音に顕著にうかがわれる。英開口母音〔a〕のごときも Shakespeare 時代にはなく、18世紀の中頃でもまだ〔æ〕であったが、19世紀になって〔a〕が現れたといわれる。しかし〔a〕は米音では現在も一般にさけられ、依然〔æ〕が多く、〔a:] で発する語が比較的少い。歴史的短音〔a〕はrの前や少数の孤立語の中では〔a〕となり、〔æ〕と〔a〕の差のつくのは、次に無声摩擦音〔f, s, θ〕又は鼻音〔n〕が来る時である。earth, word 等に〔ɪ〕(すなわち、ə)が入ることは Shakespeare 時代も同様であった。この音は実際1560年頃には London では Lower 又は Lower-middle class の dialect にあったが、Southern English では次第に舌を後方に巻きこんで発し、18世紀末までには〔ɪ〕音はすっかり消失したとのことである。far, lord の母音の後に来る〔ɪ〕も同じようになったと想像される。〔ʌ〕が米音では口の開きの小さいのも、英音

〔ɔ〕が米音では口の開きが狭小で、唇を丸めぬ〔a〕になっているのも米音では200年乃至300年の英音の趣きを残している。二重母音も米音では contour がゆるいのもその進化が英音ほど急でないのを立証している。今ここに米母音のすがたを浮きぼりにするために、一般にそれぞれ accept されている General American vowels と Southern English vowels とについて比較観察する。音の標記は、米音は英音の如く長さや音質は一定した関係を現わさないので米式標記を用いる。

1) 母音 (Vowels)

記号	例	米音転写
/i/	feet	[fit]
/ɪ/	fit	[fɪt]
/e/	fade	[fed]
/ɛ/	fed	[fɛd]
/a/	bad, half	[bad], [haf]
/ɑ/	hot, father	[hɑt], [fɑðə]
/ɔ/	bought, long	[bɔt], [lɔŋ]
/o/	low	[lo]
/ʊ/	good	[gʊd]
/u/	food	[fud]
/ə/	cup, method	[kəp], [méθəd]
/ɪ/	bird, water	[bɪd], [wɔtɪ]

/i/ は英長母音 [i:] の性質をおび、busy, country 等の如き語の語尾で、英音では [bɪzi], [kántri] と短かく発する所を、長めに [bízi], [kéntri] と発する。

/ɪ/ は英音の短音 [ɪ] に殆ど等しく、ただ語尾や接頭辞 re-, pre で米音 [i] が [ɪ] にとって代ることがある。

/e/ は英音 [ei] に相当するが、英二重母音ほど強く二重母音化しない。

/ɛ/ は英音 [e] に似ていて、英音 [e] を発するところは frat [ɛ] が用いられる。

/a/ はしばしば英音 [æ] に似ているが、英音 [a] 又は [æ] より舌の位間の高い音である。英音 [æ] と同じか、英音 [ɑ:] で発する語で綴字 r を有し

ない語は〔a〕と発せられる。

例ば、英語 class [kla:s], answer [á:nsə] は〔klas〕,〔ánsɪ〕となる。

/a/ は綴字 r のない語の英音〔a:〕にほぼ等しい。例ば英語 father [fá:ðə] は〔fáðɪ〕, そのほか、英短母音〔ɔ〕で発せられる語、pot, not, lot, shop, doll, bother, correspondence 等は〔pat〕,〔lat〕,〔lap〕,〔dal〕,〔báðɪ〕,〔kərəspánəns〕と発する。故に bother と father とは韻を踏む。

/ɔ/ は英音〔ɔ:〕と英音〔ɔ〕の中間音で、どちらかというとなら〔ɔ〕に近い。pause, talk, sort 等英音で〔pɔ:z〕,〔tɔ:k〕,〔sɔ:t〕と発せられるところは〔pɔz〕,〔tɔk〕,〔sɔɪt〕と発せられる。又英短母音で、long [lɔŋ], dog [dɔg]と発せられるところはこの音で発せられる。

/o/ は相当唇を丸めて、米音特有の〔ɪ〕が後続しない限り、しばしば幾分二重音化する。故に、たいていの英二重母音〔ou〕は〔o〕で発せられる。

/v/ は book を英音で発する時の母音に幾分似ているが、英音ほど唇を丸めぬ。英短母音はこの音で発する。

/u/ は大体英長母音〔u:〕と同質であるが、米人は、Dr. Palmer の所謂 crooner's 'u' で発する。〔u〕のも一つの特長は英音〔ju〕がしばしばこの音で発せられる。すなわち、knew, duty, newspaper, during, student 等は〔nu〕,〔dúti〕,〔dúriŋ〕,〔núspeɪɪ〕,〔stúdənt〕と発するものが多い。

/ə/ は英音〔ʌ〕に代わる音で、中央母音に綴字に r を含まない時に発せられる英音〔ə〕に代わる。例へば、sofa [sóufə], idea [aidə] sun, son, cup, cutter, some, method 等はしばしば unstressed position では〔sən〕,〔sən〕,〔kəp〕,〔kétɪ〕,〔səm〕,〔méθəd〕である。然し米人の中には Southern English の〔ʌ〕と〔ə〕を区別する人もあると聞く。

/ɪ/ は米音特有の音で半母音の性質をおび、高い舌の部位で発せられる弱い短母音〔ɪ〕の音質を持っている。それは舌先を硬口蓋の方向に巻きかえすようにして発するか、舌全体を両側から縮め上げるようにしながら舌全体を後にひきよせるようにして発するからである。英音〔ɪ〕は舌位置が口蓋にずっと近づくので摩擦的な子音〔ɪ〕の音質をおびた〔ə〕である点で米音〔ɪ〕と異る。米音〔ɪ〕は英音〔ə:〕に代わり、綴字 r を含む語即ち、bird, fur, first, work 等は〔bɪd〕,〔fɪɪ〕,〔fɪst〕,〔wɪk〕と発し、string [striŋ] と

stirring [stɪrɪŋ] を contrast してみるとその違いが判然する。

2) 二重母音 (Diphthongs)

米二重母音の特徴は英二重母音程ははっきり二重母音化せず、長母音的である点である。[e], [o] の Variants として [aɪ], [av], [ɔɪ], [ɪɪ], [ɛɪ], [aɪ], [ɔɪ], [oɪ], [vɪ] がある。

[aɪ], [av], [ɔɪ] は英二重母音 [ai], [au], [ɔi] にほぼ似ている。

[ɪɪ], [ɛɪ], [vɪ] はいずれも普通の母音で始まり, [ɪ] で終る。英二重母音 [iə], [eə], [uə] に相当する。

[ɔɪ] は英長母音 [ɔ:] に相当し、綴字 r を含む語に起る。例、sort [sɔrt], form [fɔrm]. [oɪ] は [ɔɪ] より口の開きが狭少で -ore, -oar, -our の綴字と or + 子音の綴字を含む語は多く [oɪ] と発せられる。例、more [moɪ], board [boɪd], course [koɪs], port [poɪt], short [ʃoɪt].

しかし、実際には [oɪ] を [ɔɪ] と発する米人も多いようである。

[aɪ] は綴字 r を含む語の長母音 [a:] に相当し、farm, cart は [faɪm], [kaɪt] である。

3) 母音の鼻音化 (Nazalization)

米音の特徴として、母音や二重母音が [m], [n] 等鼻音の前又は後にある時はその鼻音の影響をうけて鼻音化する傾向が強く、南部方言 (Southern Dialect) において一層著しい。nasal twang 又は Southern drawl と称せられる。例、understand [ʔndɪstænd], time [tāɪm], any [ɛni], mine [māɪn], make [mēk], smoking [smōkɪŋ]

4) 米子音は次の著しい例外を除いては大体において英子音と同じである。

[t] が accent のある母音に先行し、accent のない母音に後続する時、本来の強い破裂が弱化し、曖昧化して [r] 又は [d] のごとく聞える。例、water [wɔrɪ] 又は [wɔdɪ], matter [márɪ] 又は [mádɪ], letter [lérɪ] 又は [lédɪ]。[t] は時によると [m], [n], [l], [r], [j], [w] の前では glottalize (声門閉鎖音化) されて、glottal stop [ʔ] となる。例、certainly [síʔnli], that one [ðaʔwʌn]。[-nt] が上と同じ位置にある時には [-nt] の [t] は弱化して聞えない。例、wanted [wánəd], twenty [twéni], sentence [sénəʔs], interview [ínɪvju], quantity [kwánəti]。[r] は room [rum],

break [brek], very [véri], umbrella [əmbrelə] において聞かれるように、一般に英音 [ɪ] よりも舌を後よりに引き下げた気持で発せられ、英音ほど摩擦が聞えず、半母音的である。

[ɪ] は英音のようにその位置によって clear となったり dark [ɪ] になることなく、あらゆる場合に dark の傾向である。例、live [liv], like [laɪk], well [wel], silver [sɪlvɪ] 等では dark に聞える。

[hw] は which, what 等の頭音であるが、英音では [(h)w] の二様に発せられる。概して若い年齢層や婦人に [hw] の音が多く、[w] は中年以上の特に男子に多いと云う。米音では [w] は少く、[hw] 又は [ʍ] (voiceless [w]) を発するものが多い。

以上で個々の音に就て、特に英音と趣きを著しく異にする米音の概要にふれた。なお米人の発音中、特異的なことを附記しておく。

- (1) ある種の子音、特に破裂音 [t], [g] や摩擦音 [s] が [ɪ], [e], [a] に先行する場合に特殊の渉り音 (glide) を生ずることである。例えば sit が [sɪət], get が [gɛət] の如く発せられたり、又は [set], [gɪt] の如く聞える。この音は小説の対話等には標音的に set down, git 'm go (get him go) などと記してある。
- (2) 上述 [-nt] の [t] は rapid talking ではよく消失して、want to go や going to go (註、この語法は現代米語法として認められている。cf. W. L. Clark, The Junior Crown English Course 2c, pp. 71) 等の如きは、[wənəgo], [gənəgo] と発せられる。
- (3) Spelling pronunciation. 単語を spelling 通りに発音することは前記 Nasalization と共にアメリカ発音の顕著な特徴の一つであるが、この原因に就ては学者間に所説が種々で、決定的なものがない。気候からくる nazalization に因る (White; Words and their Uses) とも、米音は概して高めに平板に発せられ、英人よりも調子が高いためだ (G. P. Krapp, Pronunciation of Standard English in America) とも両者の発音相違の重点は Intonation (抑揚) だから (Robert I. Manner, The Pronunciation of English in America, Atlantic Monthly) とか所説は紛々である。

Suggest は普通 [səgdʒést, less freq. sədʒést], schedule は [skédʒvɪ]

Thames [θemz] が最も普通で, [təmz], [temz] の順になっている。Mary は [mé:ri], [mé:ri], [mé:ri], [méri] の順であるが, 人によっては長音 [ɛ] によって merry と区別するものもある。その他 period [píriəd, pí:-, píruəd] の如く発する (Kenyon and Knott, A Pronouncing Dictionary of Am. Eng.)。国柄上 spelling を気にかける習慣からこのような発音が生じたとも思われる。N. Webster が例の有名な American Spelling Book を 1783 年に出し, 1889 年までには 6,200 万部も売ったが, これが国内のみならず, 我が国などにも波及, 当時の best seller であったという事実から考え合せると思いなかばするものがあらう。

- (4) Stress accent. 米語の Stress が英語におけるよりも, 強い secondary accent で発せられることは衆知の事実である。Primary stress に続く 2 乃至 3 syllables あとの [ə] 音が米音では, [ɛ] の如く発せられる。この現象も原因はこれと云う決定的なことはいえぬが, 前記 Spelling pronunciation の speech habit に起因するのではなからうか。Krapp はその遠因をやはり Nasalization に帰している。音が Nasalize (鼻音化) されるため, 英音の如く発音が容易でなく, 自然音の contour が単調平板になるので, 出しぬけに最後の syllable を plosive で, 型にはまった様に一々の音節を明瞭に発しようとするためぐつつくような発し方になると云う, 勿論わが東北弁の鼻音とは本質的には異なるが articulation の仕方において相通ずるところがあるようにも感じられる。次に Secondary stress で発せられる米音を含む語について英米両音を記号で標記してみよう。

<u>Word</u>	<u>American Pronunciation</u>	<u>British Pronunciation</u>
library	[láibrè:ri]	[láibrə:ri]
dictionary	[díkfənè:ri]	[díkfən(ə)ri] or [díkfɒ:ri]
territory	[tèrətò:ri]	[tèrit(ə)ri]
category	[kátigò:ri]	[kætig(ə)ri]
nominative	[nómənètiv]	[nóm(i)nətiv]
ceremony	[sérəmò:ni]	[sériməni]
extraordinary	[íkstrəd:ni] or [ékstrəd:ni]	[ékstrɔ:dni]

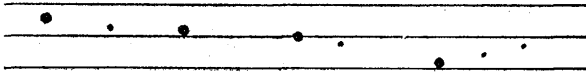
- 5) アメリカ口語の抑揚 (Intonation). 音調からみても語法から見ても, 米口語

の発話の中に本質的には祖語たる英語と一貫して相通ずる伝統的な類似性が流れていることは論を俟たぬ。一貫する the genius of the language とでも云うものであろう。それは彼等の感情情緒の流露をそのままに表現する living speech のうちに躍動する音調に視うことが出来よう。音調 (Intonation) は新言語学の定義するところでは Supersegmental phonemes (かぶせ音素) で, Segmental phonemes (分節音素), すなわち, speech sounds を思想感情を伝える sound signals とみ, その system の中で唯一の signal phoneme を signal として把握理解するには, 一つの speech の中で, それと一緒に働く他の signal とをその Segmental phoneme に結ばねばならぬ。他の signals とは Jones, Palmer 等の所謂 speech-sound attributes (音の属性) とも云うべきもので, Stress (音の強弱), Pitch (音の高低) と Juncture の三つである。(D. Jones, The Phoneme, its Nature and Use. K. L. Pike, The Intonation of American English)

本稿ではやがて到達しようとする現代アメリカ口語の相をつきとめる伏線ともなる最大の要因である Pitch phonemes を観察するにとどめよう。英米両者の抑揚が多少の差こそあれ大極においては相通じていることは既述の通りであるが、両者の抑揚中注目に値する相違が三つ視われる。それは、


1) 英語抑揚のうち所謂 Tune 2 (Rising Tune) に相当する米語のTune は、常に必ず mid- 又は多少 low-pitch で発し, final rise に至るまで平板であるということである。しかも、その語調の平坦さは、後に如何なる stressed syllable が続いてもそれによって影響をうけない。例ば、

(1) 英音の場合:

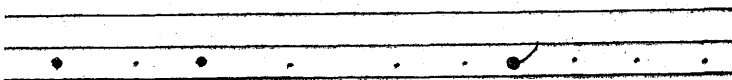


díd	it	ól	hæpn	jéstədi?
Did	it	all	happen	yesterday?

(2) 米音の場合:



did	it	ól	há pən	jéstɹɪde
-----	----	----	--------	----------

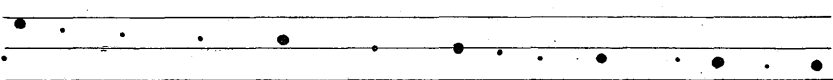


hwát ðə kán frəns haz tə dú, ɪz tə mek...
 what the conference has to do, is to make...

(注) ♪ は陳述の未了を表わす。

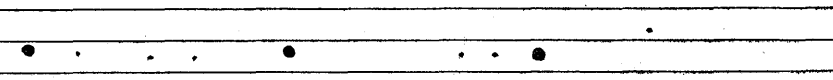
(3) 同じ Intonation Type を異文について比較すると、

英音の場合：



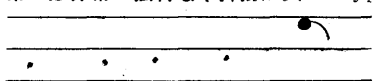
bət ɪznt ɪt ðə məʊst ɪkstrɔːdnri θɪŋ, juː évə hɜːdɒv?
 But isn't it the most extraordinary thing you ever heard of?

米音の場合



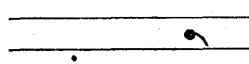
kʊdnt ju əv mánɪdʒd tə əvɔɪd ðəm?
 Couldn't you have managed to avoid them?

2) 第二は非常に独特な米抑揚は次の Type である。

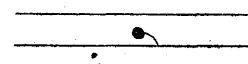


この Type は文の中途によく起るも

のであって、英音なれば上記の如き Tune2, すなわち単なる上昇調をとる。これは文意の未完を示唆する場合には文尾にも起り得る。米の Pike 教授はこの type は躊躇を示唆し、又時に親しみの含意を持つと云っている。英の D. Jones 教授は感嘆的な場合に聞いたと述べている。例：

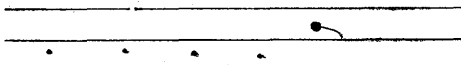


(1) gʊd baɪ
 good - bye.



(2) həló.
 Hullo.

註. (1)は米婦人に多く男子には少い。



(3) aɪ wʌnə get áʊt ('but I can't'.
 I want to get out. を示唆する)

註. (3)は英の Jones 教授が曾て米国旅行中一米婦人が自分の降車駅で降りるのを忘れ、列車が動き始めた時にあわてて発するのを感銘深く聞いたと云っている。この抑揚は Pike の下の例 (Pike, *Intonation of American English* pp. 50) に一致する。(Pitch, Contour その他を示す数字記号については上記の著書の Preface, pp. VI 参照)

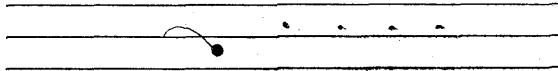
I want to go…… (but I can't go)
3- °2-3/

Well I studied…… (but guarantee no learning)
°2-3/4-°2-3/

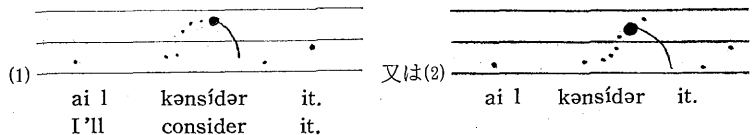
註. 上記 °2-3 の Type は発話の終りでは、次に何か言わんとする感情を示唆し、陳述の未完、躊躇を示唆する。

この Type で発話が一時中断すると聴者は話者が話を続けるのを期待するか、話者が何か云い出したくて云い出せないで躊躇しているのだという気持ちが直ちに聴者に伝わる。時に文尾の °2-3 調は特に女性に多く用いられ、My Robert
3- °2-3 / のような endearment を含意すると Pike も述べている。

3) 上掲 2), に示した抑揚型の普通変形は次の type である。



註. 上の型は中位又は低い Pitch で Stress のある syllable か、Stress のない Syllable で始まり、高低の降昇調で終る。これに相当する英音調は：



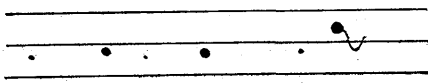
(, though 'I can't promise to do it' を示唆する)

上掲(1), (2)の英音調から、米音調の降調の程度は

英音調よりも遙かに平板であることがわかる。

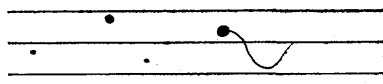
米音調の全降昇はそれに先行するどの Syllable の Pitch-level より高いことがわかる。例,

米音調



i? wázn̄t mótʃ tə ásk.
It wasn't much to ask.

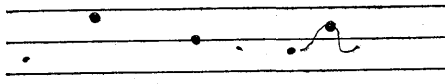
英音調



it wózn̄t áuəz.
It wasn't ours.

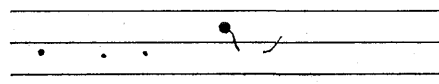
('it must have been someone else's' を示唆する)

米音調



wɪr glád tə be in ínglənd.
We're glad to be in England.

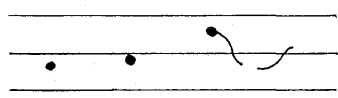
英音調



wi: kán̄t dú: it tədəi.
We can't do it today.

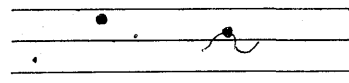
('though we might perhaps be able to do it tomorrow' を示唆する)

米音調



a₁ wázn̄t rédi
I wasn't ready.

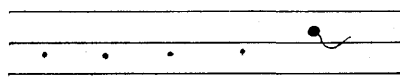
英音調



it wózn̄t bæd.
It wasn't bad.

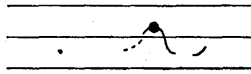
('but at the same time it wasn't very bad')

米音調



ju kʌd əv bɪn fím.
You could have been firm.

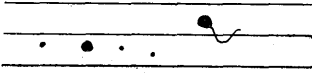
英音調



ju:d bétə.
You'd better.

('or else' で始まる文節を示唆)

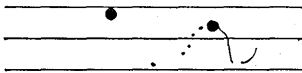
米音調



wi s'itnli kán

We certainly can. ('Can you come here?' に答えて云う)

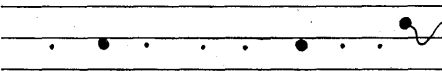
英音調



ai m ɔ:fli sóri.

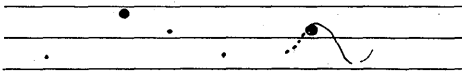
I'm awfully sorry. ('but it couldn't be avoided' を示唆)

米音調



wi hápnd tə bɪ pásɪŋ əlɔŋ.
We happened to be passing along.

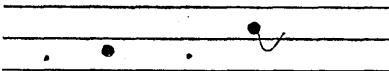
英音調



ai nju: i: kept hɔ:siz.
I knew he kept horses.

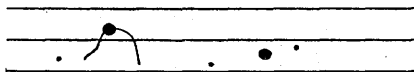
('but I don't know he kept any other animals' を示唆)

米音調



wi mín tə wín.
We mean to win.

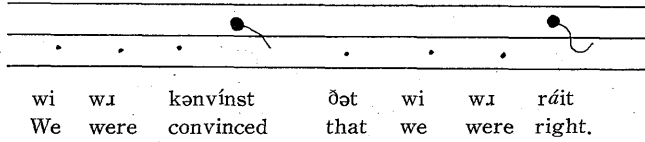
英音調



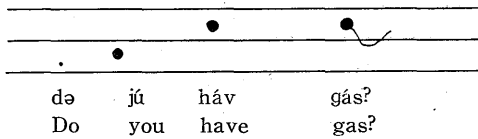
ai wɒnt tə dú it.
I want to do it.

('but I don't know if I shall be able to.' を示唆)

註、以上の例でわかるように米音調は文尾の降昇調にいたる前の syllables が大抵それより低い pitch を原則とするようであるが、時にはそれより高いこともある。例、

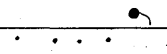


註、次の例は米医師がその患者に話しかけているのが英人の耳に聞えたものである。



British English ならば 'Do you get flatulence?' と云う。

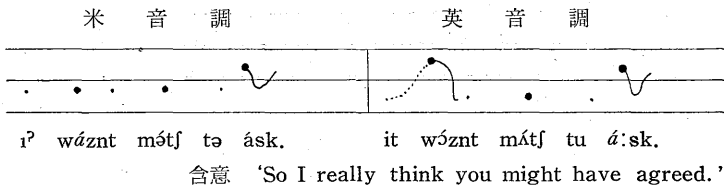
註、以上あげた米音調の降昇調は英人には耳慣れぬものとみえ、その含意が正確にはピンとこないと Dr. Jones も云っている。この型は2)の始めに示した

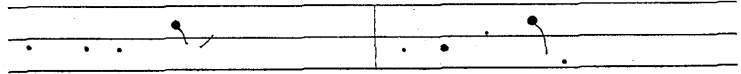
型  とあまり異っていないように思われるが、「躊躇」、「対称」、「親しみ」等の気持をより強く含んでいるように感じられる。

米国の Pike は上掲の米降昇調は大体次の三つの含意に用いられるという (K. L. Pike, The Intonation of American English, P.50)

- (1) 降昇調をおびる語は「注意の中心」となる。
- (2) それは「対称」を示唆する。
- (3) それはある種の環境、例えば、用心してものを云わねばならぬ雰囲気での発話によく現れる。

さらに米・英両音調を同文につき比較すると両者の違いが一層克明になろう。

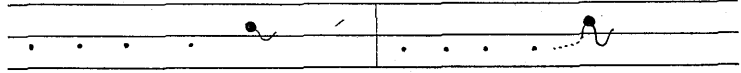




ai wəznt rɛdi.

ai wɔznt rɛdi.

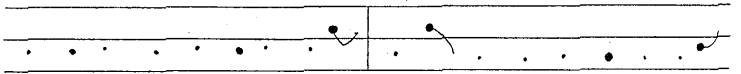
含意 'That's why I wasn't able to come.'



ju kʊd əv biŋ fɪm,

ju: kəd əv bi:n fɔ:m.

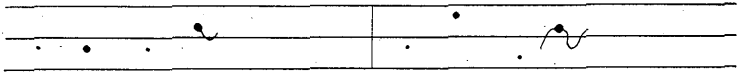
含意 'I really think you ought to have been.'



wi hɑpnd tə bi pɑsiŋ əlɔŋ.

wi hæpnd tə bi pɑ:siŋ əlɔŋ.

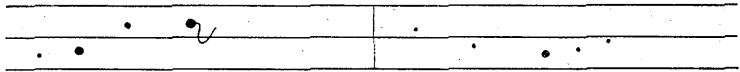
含意 'So we thought we would just drop in.'



wi mɪn tə wɪn.

wi: mɪ:n tu wɪn.

含意 'So don't make any mistake about that.'



də ju hɑv gɑs?

dju: get flætjuləns?

3. Americanism の成立. 前節において眺めてきたように連音の発音で米音は英音より pitch が平板で、抑揚や contour が単純であるのは歴史的に進化がおくれているというよりも、複雑多様な民族精神の中に、

1) Frontier 時代からの伝統的な放胆な所謂 easy-going なうちにも、あらゆる民族が相寄り相混じて、相互に吸収同化し易くしようとする the genius of the language が彼等の中に働いて米国民自身も自覚しない間に、音声も語法も卒直単純な方え流れて来ていると感ぜられる。

2) 従って表現の自由さを先づねらい、外来語も吸収同化してゆく寛容さがあった、しばしば略語、かばん語、逆成等の手段にも訴える。そこで簡明卒直で、しかも強く相手に訴える現代米口語の文体が生れることとなるのではなからうか。

3) そこで、文法規則も超脱し (synesis), 何よりも思想感情の表現の近道につくと、文も語も短縮単純化しようとする。

4) その結果大胆奔放な配置法によって、品詞の転換も意のままに行う。特に米語に形容詞、副詞、動詞の転用が頻繁であったり、動詞、名詞の転用で表現を躍如ならせる特徴が顕著なのはそのためであろう。又前置詞を二重三重に重ねて微妙な表現の巧緻さをねらう。否定も二重、時には三重に用い、その意図を強調するが、文の context によって不思議と自然に訴えるものがある。また心の強い願望を求めて、素朴な仮定法をよく用いる。

実際この傾向を米人自身自覚し、本腰を入れて米方言の研究に乗り出したのは、僅々30数年前後のことである。

Huckleberry Finn, The Biglow Papers の中にも、I. C. Neal 等から起り、Artemus Ward や Josh Billings にいたる、19世紀の方言で書かれた文学中にこの全米的な方言は散見されるが、未だ当時ははっきりした形態を現していない。その後ヨーロッパから多数の移民が入るに及んで今日の如き特異な相をとるようになるが、当時或一部ではその地区の特有な localisms の研究をしていた学者はあるにはあったが少かった。W. Nelson Francis も1910代に栄えた方言文学も殆どこの全米的方言には触れていないことを指摘している。1925年の San Francisco Chronicle 紙に H. L. Mencken が「50年がかりで出来上った Oxford English Dictionary」と題して、寄稿している Article の中に Americanism について当時まだ米国の言語学者も余り関心を示していないことをほのめかしている。原文から2, 3箇所引用してみよう。

The work, as it stands, is almost miraculously accurate. I have plowed through it for hours without finding the ghost of an error. Nor have I encountered many omissions, save in purely American word. Here the fault lies not with the editors, but their American collaborators. Until a few years ago there was an idiotic notion among American philologists that the study of Americanism was somehow low. No professor of any pretensions engaged in it; it was left to laymen, and they all lacked the equipment that it demanded.

さらに Mencken は、

When Thornton's dictionary of Americanisms came out the editors of the Oxford laid it under tribute at once. But that was not until 1912, and the Oxford was already three-fourths done. In consequence it remains lamentably weak in the American department.

という。なお一例を bootlegger にとって、この語は本辞書中に載っていないことを指摘し、この語は合衆国では少くとも50年この方普通一般に用いられて、近くは英国の標準英語にまでなった位であり、The London Times もちゃんと使っている。それで多分次の祈禱書の改訂版にも用いられるであろうに、この語は Oford Dictionary に出していない。それはずっと以前1887年アメリカの言語学者たちが原稿を次々と送った時に、該辞典のAからBまでの巻がまだ編集中で件の bootlegger に接しこれはいい語だということを認める頭がなかったからだと書いている。

5) 話ことばと書きことば。どこの国語でもそうであるが、日常会話で話されることばというものは話す人と聞く人との間に用いられることばは両者間の表情や身振りにたすけられ、又ことばそのものの音声の抑揚等によって書いたことばとは非常な違いがあることは誰にでもわかつた。若しこれをテープレコーダーなどに録音して詳細に検べると、時には非論理的な個所もあり、孤立した語句のみでは到底理解に苦しむようなものもあると言語学者は云っている、がしかし前後関係や上記諸条件に相たすけられ相補われて相手には充分理解されるのである。書きことばということになると決してそうはゆかない。従って学校で教えられる芸術的な散文、すなわち書かれたことばがそのまま話されるとのみ考えるわけにはゆかぬ。そこで筆者は米口語文体の真相をつくために、先づ観点を卑近な日常会話の面にしぼり、更にその中でも次の世代の言葉の温床とも云うべき子供の言語生活にしばってみたい。

6) 子供の話ことば。どこの国でもそうであるように、アメリカの子供等も、彼等の育ってゆく家庭や社会環境の中で用いられる dialect の影響をうけぬわけにはゆかぬ。彼等は新造語や新しく工夫される表現が生滅する Living dialect の中で、時には伝統的な語法や文法にはお構いなく、どんどん彼等の生活の中の所謂 class dialect を身につけてゆく。学校で教師が短い学校教育の間だけでも、発音や語法の乱れを自覚させ、是正しようと努めて教科書の correct English を懸命に教えても、家庭社会や友だちの中では日常彼等の生活に直結している、なちんだ vocabulary や syntax で、特殊な grammar に同化してゆく。そこでは自然便利な新語、外来語の吸収も

行われ、容易な発音が扱ばれ、表現も平易化され、簡単卒直な表現が重んじられる。子供のことは彼等の発達段階に応じて段々成人のことはえと成長してゆくのである。このようにして、同時代の米人の社会的思想傾向のなかに徐々に、しかも僅かつつではあるが口語の新しい style が生れてゆくのである。材料は少し古いが今日でもそう変動しているとは思われぬので、1914年 Missouri 大学の Dr. W. W. Charters が Cansas City の小学校数校の児童に就いて行った国語教育の実態調査によって、米国の児童期における国語教育の概況を覗うこととする。彼の調査で得た資料は膨大なものであるので2組に大別する。第1組は Kansas City Public Schools 全体にわたる 3rd year grade から 7th grade までの文法教授を特別にうけぬ学童の試験答案、作文4週間の調査と第2組は 2nd grade から 7th grade の文法教授をうけた学童が5日間に教室又は校内で自然の会話の際おかす文法上の誤を教育委員会の協力の上各受持教師に依って調査したものである。学童の年令は9才又は10才から、14、5才までで、5%は12才以上である。その結果によって全米の主要地区の初等教育終了近い学童の用いる口語の輪郭をつかむことも出来るであろう。

前記調査で得た多数の学童が日常生活に使用する daily speech について得た誤りの概略を集計して出した percentage を記すと、

1) 動詞の誤用、例えば、

I set there. (=sat) ; If I was you. (=were) ; He give her hell (=gives) ; He don't care (=doesn't) ; He ain't here, (=isn't) ; How is the folks? (=are) —57%

2) 過去と過去分詞の誤用、例えば、

He taken (=took) ; and taked her. (=took) ; He loaned me a dollar (=lent) ; The man was found two dollars. (=has found) ; The bee stang him (=stung) ; The baby et the soap. (=ate) ; I had went. (=gone) ; I knowed (=knew) —24%

3) Double negation に関するもの、例えば、

No. I never, neither. ; no one don't go; etc. —11%

4) 形容詞と副詞の誤用、例えば、

It hurt terrible. (=terribly) ; this here man (=this man here) etc — 4%

5) 代名詞の誤用, 例えば,

He hurt *hissself*. (=himself); She invited him and *I*. (=me); *us follows* (=we follow); *Them* are the kind I like. (=They); No one has *their* ticket. (=his); He got *hisn*. (=his) [his(')n は mine 等からの類推] — 7%

6) 其他, 例えば,

Where he is *at*. の如く前置詞を副詞として用いたもの。It seems *like* I remember. の如く *like* を *as* の如く接続詞として用いたり, 発音癖から *sat* が *set* となったり, I would *a* thought, if you would *of* gotten in the car, you could *of* rode down の如く *have* が *a*, *of* の如く発せられて, 学童は成人の発音をそのまま聞き覚えてしまい, *dialect* になり, これが口語の特徴として全般に普及し, 口語体として固定してしまう。

上掲の *percentage* は第1組についての口頭のものであるが, 第2組すなわち文法教授をうけた組についても誤用の比率に大差のない事実から推して, 文法教授の効果は, 日常口語に関する限り, 余り期待出来ぬようである。然し *written work* における誤りはずっと少くなっていることは容易に想像される所であるが, 誤用の多い動詞活用についても24%から5%に激減し, 代名詞の誤用にしても7%から1%となっている。ここに注目すべきことは, 全体を通して, 動詞, 代名詞, *double negation* の誤りの著しいことである。わが国の中学生の英語教育に鑑みても首肯出来よう。この資料は合衆国の一地区のものに過ぎぬかも知れぬが, 先に N. Nelson Francis が述べたように, 交通機関其他の発達によって, ヨーロッパ諸国よりも *dialect* の差違が少いとされている合衆国全体の口語の概況も, 勿論各地区に多少の *localism* の特色は発音なり, 語法, 語彙の面にあっても, 大同小異であろう。

(Krapp: The Pronunciation of Standard in America, pp. viii)

4. 語彙—造語と借用語 Practical で *easy-going* な国民性を反映してか, *Speech* の波が昇降急な *British English* に反して, 比較的平坦緩慢で, 一般に *Spelling Pronunciation* を好み, *slip shod* な発音から, 音の *elision* (脱落), *assimilation* (同化), *liaison* (連結), *disassimilation* (異音化) 等の現象が目立ち, このような *utterance* がその文体に及ぼす影響も自然の勢であろう。従って好んで用いられる口語の単語も *big words* を嫌い, 単綴の語か, 此等の語が *amalgamate* されて, 本来の口語とは趣きを異にする当意即妙な合成語が *coin* されてゆくのである。勿論始

めは個々の語が isolate して、例えば、grown up, さらに hyphenate されて grown-up となり、さらに熟して grownups と純粹に名詞化すると云った process をとって、Coin されてゆく。babysitting, sitdown (坐りこみスト), a 15-year-old girl, hit-and-run, do-it-yourself fans (日曜大工), a-hey-my pal friendship (10年の知己といった友情), さらに動詞にして、'They my-dear-fellowed me when they first met' 等と融通自在である。backformation も英本国のものとは異ったものが遠慮会釈なく現れる。stump words のような handy なものは頻繁に出廻る。examination, co-education, gentlemen, dormitory, laboratory, poliomyelitis 等がそれぞれ, exam, co-ed, gents, dom, lab, polio と頭のみが用いられたり、influenza, omnibus, automobile, Uncle Sam 等は語尾のみで、flue, 又は flu, bus, mobile, Samと使い、はては Peevish, barber 等の如く、back formation で peeve, barb 等と動詞に用いる。motorist's hotel > motel と blend されてカバン語 (portmanteau words) が工夫され、electricity + execute > electrocute, electrocution (電気椅子で死刑にする電殺), television + broadcast > telecast の如く続々造り出されるのは、その国柄 United States の如く、自国語、外来語を問わず、万事が実用主義で迎えられる。bus や car に乗って通る時ガタンゴトンと揺れるとペコペコ頭を下げる道路を横切る小溝はすぐ a thank-you-ma'am と呼ばれ、通用するところに、いかにもアメリカらしい潑刺としたほほえましい国民性の一端がのぞいている。このような表現を拾うと限りがない。この様にして語彙も寄合い世帯の国民生活から生れて来るのだから口語文体には英国英語に流れているような snobbish な格式ばったところがなく、文法も破格になるのが自然の勢であろう。そこで文体に入るに先立って、外来語を一瞥してみたい。

外 来 語

1) フランス語に由来するもの

gopher—地ねずみ (大戦末期日本軍が巧みに地下壕を掘ったところから、日本兵をかく仇名した), pumpkin 西洋カボチャ, (pie) ala mode—icecream 付きの pie dessert, chute—射水路, crevasse—堤防の裂目, prairie ミシシッピ流域の大草原, depot—駅, bureau 鏡付タンス, 局, shanty—小屋, toboogan, cent, dime, apache—ごろつき (もとパリ市で徒党をくんで横行した), Canuck—仏系のカナダ人, charivari—ドンチャン騒ぎ, parley—討議,

picayune—小銭, rotisserie—焼肉店, sashay—すべる様に進む。等々

2) Spanish に由来するもの

alfalfa—紫うまごやし(人名に用う), bonito—はがつを, ponpano—ごぼん
 あじ属の魚, cockroach—油虫, coyote—狼, pinto—まだら馬, jerk—干肉,
 mescal—メスカル酒, tequila—龍舌蘭から作った酒, sombrero—広ふちフェ
 ルト帽, ten-gallon hat—cowboy の広ぶち帽, corral—柵, 囲い, lasso—
 投げ縄, rodeo—ロデオ, peon—雇人, ranch—牧場, stampede—牛馬の暴走,
 cafeterria—selfserviceの食堂, plaza—広場, pueblo—土人部落, bonanza—
 富鉱帯, desperado—無法者, hoosegow—刑務所, vigilante—自衛団員,
 canyon—峡谷, key—島, mesa—鋸歯のようにそそり立つ山脈, coon=racoon
 —づるい奴, dago—色の浅黒い外人, mulato—白黒第一代の混血児, octroon
 —黒人の血 $\frac{1}{8}$ を伝える混血児, (白と quadroon の混血), pickaninny—黒人の
 子供, loco—気狂いの, hombre男の一人, marina—ヨット港, rumba—元はキ
 ューバ土人の踊り, bronto—急速に, savvy—知る (Me no savvy, =I don't
 know), temblor—地震, vamoose—逃げる, 付記—café+terria (現れる
 の意)は1918年に Webster に入ったが, それよりも10年前に既に California
 に現在の意味で現れる。Spanish の多い町, 村では多産的な suffix として,
 carniceria—肉屋, ferreteria—金物屋, tintoria—染物屋, carpinteria—建築
 屋, abarroteria—食糧店, bookateria—本屋, snacketeria—簡易食堂, sha-
 veteria—理髪店, loncheria—手軽弁当屋, smuketeria—たばこ屋, 等々と40
 語も派生するに至る。

3) オランダ語に由来するもの

cookie—自家製小ケーキ, 英の biscuit, waffle—ワッフル, caboose—貨物
 車後部の事務員用車, sleigh—そり, a span of horses—一つなぎで追われる
 (牛)馬, stoop—玄関, boss—ボス (v. boss over~), Yankee—New England
 の人々, 一般に米人, dope—ドーブ塗料, でっち上げる, 麻薬, logy—にぶい,
 spook—お化け, boodle—わいろ, v. として用いると boodlize となる。
 boodleistic (adj.), boodler, boodleriom, boodling となり, boodlery は
 OED の supp. にも収録。

4) ドイツ語に由来するもの

beer-soup—beer の残り (bartender の用語), bock beer—黒ビール, delicatessen—調理した食品, frankfurter—ソーセジ, hamburger—肉サンド, lager beer—元ドイツ産の弱いビール, noodle—そうめん類, sauerkraut—牛肉の塩焼き, 塩漬キャベツ, semester—セミスター, stein—陶器製ビールコップ, bum—浮浪人, cf a bunch of bums 愚連隊, hausfrau—主婦, ouch!—痛いノ, 其の他接頭語 ker より, kerflop—どさりと倒れる, kerplunk—どすんとぼうり出す, kersmash—思い切りなぐる 等々の口語を生む。

接尾語—fest, —burger より, gubfest—無駄話の集り, talkfest—楽しく語り合う略式会合, swatfest—ヒットの多い野球試合, slugfest—激しいボクシング試合, frankfurter, wienerwurst, hamburger steak (1884), ham burger (1901まで), cheese-burger, chicken-burger, fish-burger, shrimp-burger, turkey-burger, lamburger, ham-and-egg burger, riceburger, さては戦時肉節約を Trumanburger と云ったものまで coinage は自由奔放である。

5) 北米インデヤン語より借入したものは特に多いが極普通なものあげると、

- 植物では, catalpa, hickory, persimmon, squash 等
- 動物では, skunk, terrapin, muskrat, chipmunk, raccoon, moose 等
- 政治方面では, Tammany, mugwump, caucus 等
- 食物類では, hominy, hoock, pemmican, pone, succotash 等
- 風俗では, maniton, powwow, sachem, totem, squaw, papoose, maki-naw boat, mocasin, tomahawk, wigwam 等米語として通用する。

5. 米口語文体の成立

1) 子供の口語文体。ここに、中学から高校位の子供達の日常会話に用いられる口語文体で書かれた日記文と中西部の悪童共の極くだけた会話を比較して、未成年者達の口語のすがたの一端をうかがってみよう。特に米語的な文体はイタリック体とし、括弧内に簡単な註をつけることとする。

1) Today being Lincoln's Birthday, we had *a day off* (=a holiday from school, work, etc. for any reason whatever) from school. So we all *hopped into* (=jumped into, got into) Jed Collin's car and went for a drive in the outlying districts of Brackton. Jed's car is a "hot rod".

(=an automobile, the motor of which has been made into an ultra-efficient and valuable piece of mechanism. The body of such a car is of minor importance, and as much as possible of it, e.g. doors, hoods, etc., has been dispensed with. A "hot rod" owner may spend thousands of dollars on his car.) He has the motor all tuned up so that his car will do a hundred and ten miles an hour, even though it looks a rusty old wreck. But Jed isn't a reckless driver, and he never *speeds*. (=excels the legal speed limit. British, *speed up*) His father knows that he likes to *fool around with* (=work on or tinker with) motors, but I heard him say that Jed would lose that car the first he *got word of* (=heard about) any speeding or other kind of *monkey business* (=mischievousness) on the highway.

We almost did get into trouble, but it wasn't Jed's fault. About twenty miles out of town we met other hot rod coming towards us. The driver looked about eighteen, and he was driving with one hand on the steering wheel and one leg *out* (*out of*) the window. He was in the wrong *lane* (=right or left side of the white line on a highway) on a curve, and narrowly missed colliding with us. We avoided him, but he lost control of his car and crashed into the white fence at the side of the road.

Of course we stopped to find out if he was hurt and see what we could do to help. Fortunately, the boy wasn't injured but he *was badly shaken up* (=was shocked, mentally, physically or both) and very *scared* (=frightened). A police patrol car came by shortly afterward. The *patrolman* (=a policeman who patrols in a certain district) looked suspiciously at Jed and his hot rod, but we all convinced him that Jed had had nothing to do with the accident.

I, for one, (=I myself; for myself) have learned by another's experience. No one *will* (=shall) ever catch me driving carelessly or trying to show off in a car. Janet Callendar, Diary of an American

Boy.

この幾分改まった文体の中に斜体字の示すように Americanism が散見されるが、普通の英文で、英人にも strangeness を感じることなく充分理解出来よう、しかし次のように奔放なだけた会話となると、Americanism が横溢、躍如として、アメリカ中西部の少年の言葉の実体が彼等の音声とともにいきいきと描き出されている。

2) "Ah gee, *lez* (=let's)—oh, *lez* go down the lake and *swipe* (=steal) some *mushrats* (=bushrats) out of somebody's traps," Cy was yawning.

"And get our ears beat off!" grumbled Earl Haydock.

"Gosh!(=by God), these cigarettes are *dandy*(=very good)." "Member when we just kids, and used to smoke corn-silk and hayseed?"

"Yup (=yes). Gosh!"

Spit. Silence.

"Say (=I say) Earl, *ma* (=mother) says if you chew tobacco you get consumption."

"Aw (=Oh) *rats* (=damn), your old lady is a *crank* (eccentric person)."

"*Yup* (=Yes), that's so." *Pause.* "But she says she knows a *fella* (=fellow) that did." "Aw, gee whiz (=Jesus), didn't Doc Kennicott used to chew tobacco all the time before he married *this-here* girl from the Cities? He used to spit—Gee! *Some shot* (=good marksman)! He could hit a tree ten feet off." (Sinclair Lewis, Main Street, 103—4)

註、上の2例とも17.8の lads の口語であるが1) はみえや外見にかまわず唯速力本意に造られた通称 *hod rod* というに乗ってヒヤヒヤする場面にあう。車の主はモーターいぢりが好き(……like to fool around with motors)なこと。Jedに限って「神風運転」(a reckless drive)などしないと、かばう気持。Jedの父が speed 違反やふざけた真似(monkey business)でもしたら最後、車はとりあげると言う。teen-agers のふざけた運転が躍如としている。幸い大事にいたらず、まっさおになる(…was badly shaken up)。日誌終末で No

one will ever catch me で作者が反省を述べるところでは、米語の will, shall が混用されている実状の一端もうかがわれる。

2) ではどここの国でもある子供のちょっとした出来心からのいたずら相談や大人の真似をしたがる無謀な少年の気持がその口語の中にまざまざと表現されている。彼等の訴える力は、盛んに飛び出す口語独特な, gee, gee whiz, gosh, rats 等の expletives が自然の合の手になって、湧き出る簡潔な表現や “and get our ears beat off!” “’Member when we just kids and used. ……?” 等の頭部省略 (prosiopesis) や省略の simpleness によるものであろう。さらに目を結婚早々の一青年の口語文体に向けてみよう。

3) 成人の口語文体

I and Florrie *was* married the day before yesterday just *like* I told you we *was* going to be… You *was* to get married in Bedford, where *not nothing is* nearly half so dear……. The sum of what have *wrote* down is \$29.40. Allen told me I *should ought* to give the priest \$5… I never *seen* him before……. I *did not* used to eat *no* lunch in the playing season except when I *knowed* I was not going to work…… I *guess* the meals *has* cost me all together about \$1.50, and I have *eat* very little myself……

I was willing to tell her all about *them* two poor girls. They must *not be no* mistake about who is the boss in my house. some men *lets* their wife run all over them…… Allen *has went* to a college football game. One of the reporters *give* him a pass…… He called up and said ……He called up and said he *hadn't* only the one pass, but he was not hurting my feelings *none*…… The flat across the hall from *this here* one is *for rent* (=British, to let)…… If we should *of boughten* furniture it would cost us in the neighborhood of \$100, even *without no* piano…… I consider myself lucky *to of* found out about this before it was too late and somebody else had *of gotten the tip* (*have gotten a bit of information such as a clue, hint or warning*). It will always be *ourn*, even when we move away…… Maybe you could *of did* better

if you had *of went* at it in a different way …… Both *her* and you *is* welcome at my house …… I never *seen* so much wine *drank* in my life.

Ring W. Lardner, *The Busher's Honeymoon*

上文は一青年の手紙であるから *careless oral talking* でないので、I didn't used to …… を I did not used to ……, I ought to …… を I should ought to … (ought は米口語では、過去を表わす had ought to …… がよく用いられる —Sinc. Lewis, *Arrowsmith* 30, 20.), it'd cost us を it would cost us と書いている。唯一個所だけ …… he hadn't only the one pass と書いている。ain't も姿をみせていないが、おそらく口の上であつたら随所に用いられよう。

作者は筆の上だから *carefully* に記しているが、*idiomatic usages* となると、どうしても少年時代からのお里が出る。ここに我々は3の6)に掲げた Dr. Charters の調査結果に期せずして思い当るのである。先づ動詞の *tense* の誤用、*knowed* の如きもの、代名詞の格の誤り、二重、三重の否定、名詞主語と動詞の *concord*、はては所有格 's が -n になり、完了助動詞 *have* は *corrupt* して、*of* となるなど米口語の真相が随所に現れて、一々指摘するまでもない。前調査結果から抽出したと同質の発音や *careless mistakes* とは言えぬまでに固定している特異な語法、語彙が一貫して出身の所を異にしている諸作家の中に見出されるのである。ここに我々は全米語に一貫して流れている一つの *Common speech* として *Americanism* が次第に定着しつつある、ことばの営みを見ることが出来る。*living language* の中に *slang* が生れ、淘汰され優勢なものが *outlive* し、また *dialects* の中からも同様な現象が繰返され、それ等が次第に融合して、現在の *Colloquial American usage* となって、新陳代謝を続けているのであろう。それでこそ規範文法家達が如何に焦慮しても如何んとも出来ぬ *synesis* が真に言語の生態であらう。

6. 口語の発音

Sound system の梗概に就ては既に略述したので、口語の実態より得た、即ち口語の *functional* な面で語法の働きに伴って作用する *accidental (juxtapositional)* な音声変化を概観すると、

1) *Rapid talking* では *One sense unit* の *syllabic* を *core* に他の *syllables* を *blend* する場合 *accent* のない *syllable* 又は *syllables* は *accent* ある *syllable*

に blend されて子音又は弱い母音は消失し、一語の如く発せられる。

- come here は [kmfə] の如く accented vowel のみ卓立して発せられる、
c'm'eer の如く文中に標音的に記されることもある。
- *Come're*. Come here. Did you ever see that kid out there, before? —J.
Steinbeck, *East of Eden*. (おいで来てごらん。あそこにいる子供見たことある?)
- *This'eer* book (=this book here) —Ibid.
- Come here, *yuh* (=you, [jA]) young *squirt* (=boy), *come'ere*—Ibid.
- Oh, you're tough, *uh?* *Come'ere!*—Ibid.
- How are you? が [hai] となり *Hi* と記される。[hiya ともなる]
- *Hi*, kate, *Hi*. Dad—J. Steinbeck, *East of Eden*.
- *have got to*—(must, have to) などにおいて have が落ち、*got to* ~ の -tt-
が一つに吸収され、[gatə] となり *gotta* と記される。
- I *gotta* know who I am, I *gotta* know what I'm like—Ibid (僕は自分が誰
だか是非知りたい。どんな人間だか知らなきあ。)
- I *gotta* go now, kid; you see, I *gotta* make some money. etc.—Ibid.
- 2) 音のSimilitude をたよって、隣接する2音は assimilate (同化) 又は elide
(消失) する。特に破裂音や破裂音と摩擦音、鼻音と破裂音の並列で、
- *Whatta yuh* (=What do you) want?; *What'd* (What did) she look like?;
Whatta you want to drink?: *Whatta yuh* think? etc.—Ibid.
- Oh, please don't (tell). I don't *want' cha* (=Want you). (ね、お願い、
云わないで、私云ってほしかかないの、)
- Why *don'tcha* (=don't you) ask me where I've been? (なぜどこへ行って
来たって聞かないんだ)
—Would *yuh* tell me? (聞いたら云うかね) —No, (いいや)—Well, what's
the use of my asking? (じゃ、聞いたってしょうがないや。) —Ibid.
- You're, you're just a kid, *ain'tcha?* (あんた、あんたまだ子供じゃない?)
—Ibid.
- Just *wanta* (=want to) talk *to'er* (=her) (ちょっとあの人に話したい)
—Ibid.
- You don't *wanta* get yourself hurt. (けがなんかしたかなかろうが) —Ibid.

3) rapid talking 又はそうでなくても、米人特有の nasalization が motor economy (音声経済) と相俟って [n] 音に近い破裂音 [t], [ŋ] が [n], [m] に assimilate する傾向がある。例えば、I don't know が [aidannóu] の如く。I dunno とも記される。

- Cal wasn't home all night, Boy (interjection), is he gonna (going to) catch it from dad. (キャル—晩中うちにいなかった。やあ、お父さんにお目玉喰うぞ。) —East of Eden
- Dad gonna be there?—why sure, he's going to buy it. —well, I'll ship (=escape) it. (……「じゃあ、僕よそう」) —Ibid.
- Well, you gonna come or not? («それで、来る気か来ない気か?») —Ibid.
その他 When are we gonna get married?; you're gonna make a wonderful mother, Abra; I'm not gonna start any trouble (僕騒ぎなんか起きないさ) What are you gonna do の如く頻出する。
- Well, lemme (=let me) see 'im (=him), —Ibid.
- What de (=the) hell—Say, lemme talk! (一体何んだっけ—おい、俺に云わせろ。/) —O'Neil, the Hairy Ape.
- Mike, gimme (give me) a drink.—Don't drink any more. —East of Eden

4) Function word が weaken (弱化) することは英語の特徴であるが、特に米語では破裂音 [t], [d] に密着する of は contract (縮約) される。

- And I can't get it outta (=out of) my head that you can keep anything good as long as you can get it cold enough. («そして、なんでもよく冷しておくことが出来たら、腐らせずにとっておくことが出来るということが頭から抜け切らんのだよ) —Edst of Eden.
- All right, fella (=fellow), you run outta money. (よし、お前もお金がなくなったんだろう。) —Ibid.
その他, you'd (=you had) better get outta here; They say they see water runnin' outta the car. (貨車から水が流れ出るって話さ); you're a likable kid. Oh, go on, get outta here, Go on, get out. I'm running a business. (お前は好いたらしい子だよ。さあ、出てお行き、私商売してるんだから。); Oh, Aron'll knock outta yuh (ああ、そんなものアロンが振り払って

くれるよ。)等と頻出する。

- *sorta, kinda* (=a sort of, a kind of=rather or somewhat) 例, *sorta like an animal.* (なんだかけものみたい); *I'm sort of twisted* (=crazy). (おれは何だか気狂じみてる); *I seemed to have sorta lost him.* (私どうやらあの人を失ってしまったようよ); "First you lose your blasted arm and then you lose your blasted thumb." — "That's kinda wrong way round." (「爆発でまづ腕をもぎとられ、それから親指がふっとぶ」—「どうも、こりや話がさかさまのようだな」)といったように盛んに用いられる。

5) Contraction(縮約)は英語に限らず、どここの国語にも共通な音声経済から起る発音現象であるが、特に米語に多い。さらに語頭母音消失 (Aphesis), 語中音消失 (Syncope), 語尾音消失 (Apocope) の現象も普通口語では頻発する。特に破裂、摩擦音に多い。

- *hafta* (=have to) 例,

You're gonna hafta see him sometime, Cal. (いつか彼に会わないわけにはいかんよ、キャル); *Oh, I know I don't hafta take yuh home!* (ああ、家に送る必要ないよ。); *He must 'a* (=must have) *done somethin' to hurt 'er* (=her), (感情を害するようなこと何かしたに違いない。); *I'm older'n* (=older than) *you are.*; *I'm grown-up now but I, I still understand kid better'n* (=better than) *I do grownups.* (私も大人だけど、私今でも大人より子供の気持の方がよく分るわ) 等々。

- Tug-question (付加疑問) で *don't you?* の [t] と [j] が [-tju] から [-tʃə] と dissimilate (異化) するように, *arn't you?*, *haven't you?* は *ain'tcha*, *haven'tcha* と記して表わされる。例, *You're home, ain'tcha?*; *You sure have got a nerve, haven'tcha?* (あんたほんとに心臓ね。)
- 一般に口語の特徴は、語頭、語中、語尾で stress のない syllable が elide するが、米口語でもこの現象が著しい。例えば、*of course* が *'course* と記されるように。' *Course I suspected it right along.* (勿論ずっとそんなこともあろうかと思っていた。— *East of Eden. 'Member you said that if you wanna make money you oughta raise beans.* (おぼえてる、金もうけしたけりや豆を作れって言ったの。)—Ibid.

その他, 'deed (=indeed), 'fraid, 'round, 'cuse me (afraid, around, excuse me) 等々。

6) [n + s] の並列において dissimilation が行われるのは米人間に古くから行われる発音現象である。例えば, once [wəns] が米音では [wənt] 又は [wənts] に聞える。onct と記される。 cf. mince [mint(s)]

But aw (=oh) say, come up for air onct in a while, can't yuh? (だが, おい, たまにや空気を吸いに上 (甲板) に上って来いよ。) — Eugene O'Neil, The Hairy Ape, Scene I.

7. 口語文体の特徴

1) *monosyllabism*. 英口語でもそうであるが, 米語口語体では特に単綴の語で, 短い文に切って表現をきびきびと続け, 外来語も適当に馴致して使いこなし印象強く訴える。

- You can't at the same time *pan* (=scold thoroughly, abuse) me for my vulgarity. (同時に僕の卑俗性を頭ごなしには出来んよ。) Sinclair Lewis, Dodsworth
- Those old men should squat *cackin'* (=cackle, indulge in glib noisy inconsequent talk) in the shade of the mangoes — this was no longer ordinary to them. (年より連がマンゴの木陰にしゃがんで, わけのわからんことをしゃべっているなんてことは, これはもう彼等にとって, ただごとではなかった。) S. Lewis, Arrowsmith
- I remember him at eighty *bachin'* (=lead a life of a bachelor) it. (彼は80にしてなお独身でやってたのを覚えている。Ibid.)
- Lydia, *vamosé*. (=let's go <Mexican Spanish, depart quickly or beat it) (リヂヤ, あっちに行きな) Steinbeck, East of Eden
- Not much left after my great *fiasco*. (=F.> complete failure; action that comes to a ridiculous end) (例の大失敗のあともう金は余り残っていないよ。)
- *Huh? Yeah*, you got sense. Maybe you don't *fall for* (=be deceived by) that *slop* (=policeman. From pronouncing the word as spelled backward ecilop, slop) (エッ? そう, あんた物が分るわね。あんた私なんかのようにだま

されやしまい。) Ibid.

- You didn't *make* me, Willy. I *picked* you. (あんたが私をひっかけたんじゃないの、私があんたをひっかけたの。) Arther Miller, *Death of A Slesman*.

2) 文頭脱落 (Prosiopesis) により、たたみかけるように相手に迫る。この場合特に I とか It, 時に you など話の場で、主語が understood されて省かれる。従って It is……と云う場合より That is……と改まる時の That の refer する力が強いことも自然うなづける。 cf. That's too bad.

- *Think* this'll do for tonight. (今夜はこれ位にしておくんだね。) East of Eden
- *Go* that so far? (=Have you understood so far?) Ibid.
- *Must* be hard never to have had a mother. (お母さんがいないなんてこと辛いわね。) Ibid.
- *Makes* me *mad* just to think about a ranch. (牧場のこと考えただけでも腹がたつ。) Ibid.
- *Think* you better have your lunch now. It's time. (もう弁当にしたら、時間よ。) Ibid.
- *Got* your father's eyes. That all I can see o' him. (お父さんそっくりの目だわ。それだけがあの人の面影だわ。)

3) 文尾省略 (Aposiopesis). 相手の語勢を軽くかわすために、繰返しをさけて、強く端的に自分を主張する。特に米口語に頻用されるようである。

- "Come on and eat. You can't fish and not eat." ____ "I have." (I have fished and not eaten.) (「さあ、お上り、めし食べんことには魚は釣れません」「いや、釣ってきたよ。」) Hemingway, *The Old Man and the Sea*.
- "He hasn't much faith." "No," the old man said. "But we have. Haven't we?" "Yes," the boy said. "Can I offer you a beer on the Terrace and we'll take the stuff home." "Why not?" (=Why should you not offer me a beer?) the old man said. "Between fishermen." Ibid
- You didn't steal them? ____ "I would," the boy said. "But I bought these" (「お前、それ盗んだんじゃないね?」—「盗めたらね。でもこれは買ったんだ」) Ibid

4) 疑問詞で始まる口語では助動詞が弱意の場合、例えば *Where did you…? When will he…? Where'd you…? When'll he…?* の如く短縮される。これは勿論疑問を強化するためであろうが、口語で functional な語、すなわち前置詞、接続詞等が隣接の accented word に blend されるのと同じである。英語より米語の方がこの傾向が目立つ。

- *Where'd you get a new ball?* — A. Miller, *Death of A Salesman*.
- *What'd he say?* Ibid
- *How'd the Chivvy (=Chevrolet [Jévrølei]) run?* (「シボレー」の走り具合はどうだった?) Ibid.
- ……*my sister'll be scandalized. When'll you be back?* Ibid.

[備考] これから推して, *succeed in…*, *fail in* の英語が米口語では *in* が脱落するのが普通であることも容易にうなづかれる。

5) *to*+動詞が *noun infinitive* で補語になったり、副詞として、付加的に *after thought* の如く文尾に来る時は *to* が弱化して消失する。

- *All I can do now is wait for the merchandise manager to die.* (「今は商品部長が死ぬのを待たせよ」) A. Miller, *Death of A Salesman*.
- *All I have to do is call him buff (=refuse to be intimidated).* (「そんなこけおどしにのりさえしなけりやいいんだ」) Ibid.
- *Better have my glasses looked, (to) see if they're all right.* (「眼鏡検べてもらおう、合ってるかどうかね」) Ibid.

[注] *go help; go get* 等の形も多く用いられる。

6) 形容詞が副詞としてよく用いられる。OE においては、例えば、*bright* (形), *brighte* (副) と区別したものが、語尾の *e* の脱落で [形] となったものもあるが、抽象的に動作状態をみる副詞より、具体的にそのこと自体をみる形容詞の方が強く迫る。しかしこれも煩から簡に就こうとする米口語の傾向から由来する自然の勢であろう。例、*Now watch careful.* (さあ、気をつけてみて); *Sure, he's got that.* (そうとも、わかったよ。); *You see, I gotta (=I've got to=have to) make some money.* — *Sure, everybody's got to.* (「ねえ、お金を少々もうけたいんだ」—「そりや、誰だってそうだよ」) 等々 *East of Eden* の一作のみでも到る所に散見される。

Easy, easy (=slowly); They're *speed, aint they?*; You always laugh *hearty*. ; We got along *splendid* together. ; *too damned easy*. (あほらしい程あっけなく) 等よく米人に聞かれる。sure と surely とを使い分ける場合があるので、質すと、Surely は more polite とさりげなく答えたものもいた。要するに informal な気持、感情の高ぶっている場合形容詞が副詞に取って代るようだ。

7) 動詞によっては未だに古い *dative* が顔を出すことがある。強調する場合に多い。

- Cal! What makes you think you just have the right to come and take something like this you probably lost *those men* their jobs. (キャル! 何んだってこんなものを持って来るんだ。お前のためにあの人達首になったかも知れん。) East of Eden.
- I think I will start *me* a little business. (何かちよっとした商売を始めようと思うんだ) Death of A Salesman.

8) 米口語では、function words, すなわち、前置詞、接続詞、関係詞、助動詞又は定冠詞が弱化する場合に脱落する傾向が著しい。特に informal, familiar な場合や感情が高ぶる場合に多い。

- I don't know (but), he *scare(s)* me. (なんだか知らないけど、あの人がこわいわ。) East of Eden.
- I don't know *as* (=weakened 'that') there's any law against it, but she *don't* like it, that all. (それがいけんという法律があるかは知らんが、彼女はそれがいやなんだ。それだけさ。) Ibid.
- It was papa (that) made me leave. The Old Man and the Sea.
- You *wanna* make a profit you plant beans. (金もうけがしたけりゃ豆を作るんだね。) East of Eden
- (the) day after tomorrow, all (the) day に類するものを始めとして、ordinal numberの定冠詞まで省かれる。例、He lives on *First Street*.

9) 口語に特徴的な語句。

- *Way*……. I was *that way* for months. (私、何ヶ月もそんなだったわ。); Now *the way* I figure it is *like* you said. (僕の考も君の云ったのと同じで

す。); I don't see any way out. (どっち道避けられまい。); I love the way it looks. (その格好が大好きだ。); Mr. Trask. Excuse me, Mr. Trask, for daring to speak to you *this way*, but it's awful not to be loved.

(トラスクさん、ごめんなさい、こんな出しゃばった口のきき方をして。でも愛されていないことはたまらないの。); I know you didn't mean to be *that way*, but it is true. (あなたは何もそういうつもりではなかったでしょう、それはわかります、でも事実はそうなの。) 以上はいつれも East of Eden からの例である。

- *like*……. She's not buried in the East *like* you said. (彼女は君が云ったように東部にも埋葬なんかしてない。); We'll just act *like* it was any other old day. *Okay?* (僕達まるで何んでもない昔の一日みたいに振るまうんだよ。いいね?); I feel *like*, I feel *like* I'm to blame, too. (私なんだか、なんだか私も悪いみたいに思うの。 East of Eden.

[註] *as* も同様に用いられることがある。例, His hope and his confidence had never gone. But now they were freshening *as* when the breeze rises. (彼の希望も自信も決してなくなり、今は微風でも吹き起るように湧いていた。) The Old Man and the Sea.

- *How come*……? *How come* she left you? (どうして彼女君と別れたんだ。); Of all the people. Of all the people! *How come* he married her? (人もあろうに、よりによって! どうしてあんな女と結婚したのです。) *How come* you shot him?; *How come* you ran away from all of us?
- *guess*, *figure*, *reckon*, *calculate* を think, suppose, believe 等の意味で頻用する。例 "Free country, isn't it?" — "Oh, *yeah* (=I don't believe it.), I *guess* it's a free country all right. Only Joe said if I saw you again I was supposed to tell him. (「自由の国じゃないのかい?」 — 「あら、そうか知ら、まあ自由の国ということにおきましょう。けどね私ジョーに云われてんの、またあんなを見たら知らせるようになって。」); I *guess* I should' t' a' taken that job in the draft board. (徴兵委員会のあんな仕事なんか引き受けるんじゃないかと思う。) So I *figured* it'd be all right.; Well the way I *figure* it out. (まあね、こんなふうにならわかって来たの。); Well, *reckon* I'll have to be

goin'. (じゃあ、もう出かけるよ。) Lula Vollmer, Sun-up.; "made dad terribly angry."—"I reckon it would." (「おやちをカンカンにおこらせたぞ。」—「そうだろうと俺も思うよ。); "You've muddied up my well-water," Jule said. "I ain't so doggone pleased about that."—"I reckone I have, some," Bokus said, "but I just naturally couldn't help it none at all." E. Caldwell, Southways. (「うちの井戸よごしあがった。俺が、畜生め、こんなこと喜ぶもんか。」—「そりや、よごしました、少しわね、でもどうにも、全く仕方がなかったんで。」

(註) calculate については古くは think の同意語のように好んで用いたが元来ある事実から推理して意見を述べることであるので、今日は単なる think の意味では段々廃用されている。(A. Dictionary of Contemporary American Usage by Evans 参照)

- *in shape*……Look on, these boys are tryin' to get themselves *in shape* (=in good condition). (ごらん、この人達は身体を鍛えようとしているのだ。); Champ Lene had taken a slug through his shoulders but wasn't *in a bad shape*. (シャンプ、レーンは以前肩に貫通銃創をくったことがあったが、調子は悪くなかった。 Collier's Magazine
- *bet*……"Well, you were out all night. He was worried."—"Yeah, I bet." (=I am sure) (「それで、君一晩帰らなかつたね。彼心配していたよ。」—「そうだろうよ、たしかに。); You bet? (=Are you sure?) (きつとかね); "I bet that girl's waiting for you down there somewhere."—"Well, she can just wait." (「きつと、あの娘、下のどこかであんたを待ってるのよ。」—「なあに、待たしといていいんだ。)」— East of Eden
- *fix*……This place will be *fixed up* just like it was before. I'm gonna see to it. (こゝんところ元通りに直させます。私がひきうけます); I've been *fixing* Aron's lunch. I'll *fix* yours, too, if you like after this. (アロンの弁当作ってるの。あなたのも作って上げるわ、あとでよかったら); *Fix* me another drink (もう一杯くれ); 外に *fix up* the teeth, *fix* the quarrel, 等々と凡そ米口語でこれ程便利なことばはない。
- *No kiddin'* …"I got a contract with the British Purchasing Agency."—

“Yeah? No kiddin’?” (「英国調達局と契約してある」—「ほんとに?冗談じゃないですか?」) *No Kiddin’, Biff, you got a date? Wonderful!*—*Death of A Salesman*. さらに名詞にして, “You picked me up, huh?” —“Sure. Because you’re so sweet. And such a *kidder!*” (「僕が好きだって, エ?」—「そうよ, あんたってとても素的なんでもの, それにとてもうまいんだもの,」— *Ibid.*

• Why don’t (you) …? (*It is sometimes used not as a real question, but implies that you expect the person to do what you ask. — William L. Clark, Spoken American English, Intermediate Course*) …… Why don’t you tell the children to be quiet? (子供等に静かになって言って下さいよ); Why don’t you let me take you for a nice ride on the ferris wheel? (一緒にフェリスに乗って楽しもうじゃないか); Now listen, why don’t we all go on home? (さあいゝか, みんな帰ろうじゃないか); Now why don’t you go away some place? (さあお前もどこかへ行ってしまったらどうだね)

• Do you have …? 英国英語では助動詞 do を用いてもよい時はただ have が偶発的或は習慣的のことを表す時に限る。have の目的語が永久的所有又は属性的な時はよくない。Do you have breakfast at eight?; We don’t have many visitors は差支ないが Does she have blue eyes? He didn’t have a good character. は不可, 然し米口語ではこの規則に従わず又英国でも此の誤用が次第に勢力を占めている。(cf. Henry Bradley, *The Making of English*. p. 71)

以上日常頻繁に見られるものを挙げるにとどめた。

8. 現代米国諸作家の口語文例

今まで述べてきた口語の特徴的な表現・語句が如何に諸作家の文中に躍動しているかを覗うために, 断片的ではあるが興味ある個所を抜抄して, その妙味を鑑賞しよう。

1) “Shark?” they said, “Oh, I’d guess he was worth around twenty thousand, maybe more. He’s nobody’s fool.” Steinbeck, *The Pastures of Heaven* 「シャークのことかね, ああ, あいつ2万ドル位にはなったと思うね。ことによるとそれ以上かも知れぬ。なかなか馬鹿にならぬ奴さ」と皆は云った。

2) You ought to know as well as the next man that I ain’t a sucker. — *Ibid.* 「君としたことが, おれが(株で)やられるようなへまなんかする男でない位

わかりそうなもんだ」(註, a sucker=a person easily imposed upon.)

3) They admitted they'd hate to come up against him in a business deal. — Ibid 「みなは商売にかけちやどうも奴に一目おかになるまいと云った。」

4) They felt they had a fortune in that spring, if ever they got around to doing anything with it. Katherine A. Porter, Noon Wine 「若しいつかその泉で何かするようなことにでもなれば、その泉は一財産だと夫婦は思った。」

5) “Set down. Maybe we can make a deal. I been kinda lookin’ round for some body. Ibid 「まあ、おかけ、取り決めも出来ようさ、俺はちょっと人を探しているんだからね」〔註〕 set down=sit down; I been = I’ve been; kinda = kind of

6) But he is the closest mouthed feller (fellow) I ever met up with in all my days. Looks like he’s scared he’ll crack his jaw if he opens his front teeth. Ibid 「だが、おれや全くへその緒切ってこの方、あんな無口な奴には会ったことがない。前歯をみせりやまるで顎が裂けるとでも思ってびくびくしているようじゃ。」

7) But hardly had the war ended in 1945 than the Japanese, almost to a man, rushed off in the opposite direction with utter sincerity. Donald Keene, The Japanese Today 〔註〕Hardly……than はHardly……when (or before) の語法を逸脱して、no sooner……than と混用する奔放さが覗へる。

8) (“What have you got?” he (=the old man) asked.

“Supper”, said the boy. “We’re going to have supper.”

”I’m not hungry.”)

“Come on and eat. Yov can’t fish and not eat”——

“I have,”the old man said getting up and taking the newspaper and…

Ernest Hemingway, The Old Man and the Sea

「さあ、食べるんだよ、めしたべなきゃ魚は釣れないよ。」

「食べんでも魚は釣って来たよ」と老人は起き上って、新聞をとりながら言って…、〔註〕“Yon can’t fish and not eat”. の文体は簡素であるが面白い。English proverb, “Yon cannot eat cake and have it.” の味わいから来るものであろうか。更にまた “I have”, の retort が絶妙である。唯二語の中に老人の負けじ魂が

躍如として読者に迫る。恐らく “I have fished and not eaten” の ellipsis であろう。

9) “You may not believe me, but I’m still sorry about that. Ordinarily I’d only have *clouted* her, but my right leg got out of control. I apologized on the spot, but she wouldn’t listen to me, She was mortified *with shame*”
(W. Saroyan, Love Kick)

「僕の云うことは信じられまい、だがあのことについて今でもすまんと思ってるよ。いつもだったら、ただなぐってすまじろうが、あの時は僕の右足が云うことをきかなかったのだ。僕はその場であやまったが妻は僕の云うことなぞ聞かばこそだ。あまりだと云ってくやしかったよ。

10) But here was a marvel — the whole available supply of wheat *cornered*, Horung master of the situation, invincible, unassailable; yet behold a man willing to sell, *a Bear bold enough to raise head*.

“That was Kennedy, wasn’t it, who made that offer?” asked Kimbark, as Going noted down the trade — “Kennedy, that new man?”

“Yes; who do you suppose he’s selling for; who’s willing to *go short* at this stage of the game?”

”*maybe he ain’t, short.*”

“Short! *Great Heavens*, man; where’d he get the stuff?”

“*Blamed if I know*. We can account for every handful of May. *Steady!* Oh, *there he goes again*” Frank Norris, A Deal in Wheat

だがここに不思議なことがあった。小麦のストックというストックはみな買い占められたというのに、難攻不落の大手すぢであるホーナン目の前にまだ売りたいという者が飛び出したことだ。大胆不敵にも頭をもたげる売り方が飛び出したことだ。

「あれはケネデーではなかったのか、付け値を出したのは？ ケネデーか、あの新参の？」とキンバークが尋ねた、ゴーインは取りひきのメモをしきりにとっていた。

「そうだ、あいつ誰に売ろうと云うのかな？ こんな競争のどたん場で誰が空取引をやりたいというのだ？」

「ひょっとすると空取引きぢゃないぞ。」

「空取引きぢゃないって、飛んでもない、君、でなければ何処で品を手に入れようて

んだい?」

「おれにわかってたまるかい。五月麦は一粒でもどうなったかわかっている。まあ静まったり!おやそれまたやるぞ。」

〔註〕小麦相場取引場の食うか食われるかの深刻な利得に血眼な雰囲気の中に買占めの山はもう決したかに見えたところに急に売り方が飛び出して一瞬場内騒然の場を生き活きとした軽妙な筆致で表現し、劇的シーンがまざまざと描き出されている。big words を時折織込みながらも、全体は極平易な語句を自由に自然に使っている会話の中に緊迫した様子が音声と共に強く感じられる。

11) Yank — [*Standing up and glaring at Long.*] Sit down before I knock yuh down! [*Long makes haste to efface himself. Yank goes on contemptuously.*] De Bible, huh? De Cap'tlist class, huh? Aw nix on dat Salvation Army-Socialist bull (= *bullshit*, 一種の *curse* で *chickenshit* 等とともに日常卑語によく用いる)。Git a soapbox! Hire a hall! Come and be saved, huh? Jerk us to Jesus, huh? (= *Convert us to Christianity*...? *Hanged!* と同意の *curse* に *Jerked to Jesus!* というもある。) Aw g'wan! I've listened to lots of guys like you, see. Yuh're all wrong. Wanter know what I t'ink? You ain't no good for noone (= *good for nothing*, 三重否定で強調している), Yuh're de bunk (<*buncombe, bunkum*). Yuh ain't got no noive, get me? Yuh're yellow (= *cowardly*), dat's what (= *that's what I mean*). Yellow, dat's you. Say! What's dem slobs (= *them slobs = those careless, negligent and incompetent people*) in de foist cabin got to do wit us? We're better men than dey are, ain't we? One of us guys (= *fellows = people*) could clean up de whole mob wit one mit (= *glove hand. boxing mitten* の略)。Put one of 'em down here for one watch in de stokehall, what'd happen? De'yd (*They would*) carry him off on a stretcher. Dem boids don't amount to nothin'. Who makes this old tub (= *ship*) run? Ain't it us guys? Well den (= *then*), we belong, (= *belong to this organization, society or community; have the proper places or rightful qualities to be*) don't we? We belong and they don't. Dat's all. [*A loud chorus of approval. Yank goes on.*] As for this bein' hell — aw, nuts! Yuh lost your

noive, dat's what. Dis is a man's job, get me? It belongs. It runs dis tub. No stiffs need apply. But yuh're a stiff, see? Yuh're yellow, dat's you. Eugene O'Neill, The Haitian, Scene One.

ヤンター〔立ち上り、ロングをにらみつけ〕坐らんか、はり倒すぞ！〔ロング急ぎひっこむ。ヤンク軽べつ的な句調で続ける。〕フン、バイブルか？フン、資本階級か？あんな救世軍の主義者みたいな話はよせやい。空箱買って来いよ。ホールでも借りろよ。フン、来たらば救われんか。フン、エスさまにすがりたまえか？。おやおや！きさまのような奴の話はずいぶんきいたよ、いいか。きさま達の言うこたみなうそっぱちさ。俺の考え聞きたいか？きさまらからつきし駄目さ。きさまはほらふきさ。いくちがないんだ、いいか？きさま腰抜けだって云うんだよ。腰抜けたあきさまのことさ。おい！一等船室のぐうたらどもがおれらと何の関係があるというのか？おれさまたちの方が偉いんじゃないかよ？あんながやがや連中おれたちのうち一人行って、げんこ一つ振りや片付くさ、奴等の一人ここにひっぱってきてき機関室に一交代でも入れてみろ、どうなると思うか。担架にのせて運び出す騒ぎになろうよ。あんな奴等何の役に立つか。あいつ等貨物みたいなもんだ。誰がこの船動かすんだ？おれ達ぢゃないか？だからさ、おれ達が偉いんじゃないか。おれ達が偉くて、あいつ等だめさ、それだけのことさ。〔どっと声を合せて、そうだ、そうだと呼ぶ。ヤンクさらに〕、ここが地獄だってぬかすーこんちくしょう！腰抜けだってんだ。これこそ男一匹の大仕事だ、いいか？地獄どころじゃねえ。ここで船を動かしてるんだ。腰抜けの出る処じゃねえ、きさま腰抜けさ、いいか？腰抜けたあきさまのことだ。

〔註〕乱暴な水夫の痰呷台詞の一節であるが、簡明強裂な表現が標音的な綴字によって表わされている。米口語の極致ともいべき活きたすがたであろう。

結 び

米口語英語は、いまや Uncle Sam の旗のもとに次第に国内でも統一の方向に向かっている。海外でもその旗じるしのもとに漸次広がっていったが、世界第二次戦争をもって急速にその歩を速め、その発祥の地英本国にすら逆に浸透している勢である。従って米国自体でも、先きに本論文中で Menken の辞を引用、指摘したように、曾ては米国の言語学者が自国語の中の地方語に比較的無関心であったのは三十年も以前

のことであった。今や言語分野の進歩とともに、その広大な地域にわたる方言の研究も完成している。(W. Nelson Francis, *The Structure of American English; The Dialects of American English*, pp.485)

筆者は直接には耳より、間接には書物文献より得ることの出来た過去の狭く浅い知識に基づいて米語の音声を整理綜合し、一方これまでに得た現代米口語の資料を、小説・新聞・雑誌のうちから出来るだけ広く蒐集し、限られた紙数で特徴的な範例を分類し、これを口語の発音、語法に関係づけて口語文体の特質を究明しようと試みた。しかし数世紀にわたって変移を重ねた複雑な background を持つこの国の口語の特質は一朝にしては究められぬことは言を俟たない。しかし、交通通信の進歩によって、比較的統一されているこの国の口語のすがたは、その輪廓を幾分把握しやすいようである。口語である以上常に音声の面からの考察も重要であるが、この点では幾多研究を要する面が残されている。特に微妙な前置詞・副詞・形容詞の functioning の面や、active, practical なその国民性から醸し出される、簡潔、自由、活達な文体には強く訴える長所はあるが、又一面英国英語の持つ滋味とこまやかな色調に幾分欠ける弱点も感ぜられるようである。ともあれ、この口語には将来大きな進化が約束されているような予感も禁じえぬ。筆者は本論文に示唆した線に沿って、将来更らに広く、深くこの口語の生態を見守ってゆきたいと希っている。